

神田祭 (×能色相図)

秦の始皇の阿房宮

その全盛にあらねども

粋な心も三浦屋の茶屋は上総屋両助と

機転も菊の籬さえ

山谷風流あらましを

松のくらの品の定め

一歳を今日ぞ祭に当り年

警固手古舞華やかに

飾る棧敷の毛氈も

色に出にけり酒機嫌

神田ばやしも勢いよく

きても見よかし花の江戸

祭に對の派手模様

牡丹寒菊裏菊の

由縁もちよとど花尽し

祭のな

派手な若い衆が勇みに勇み

身なりを揃えてヤレ囃せ

ソレ囃せ

花山車でこまえ警固に行列

よんやさ 男伊達じゃの

ヤレコラサ

達引きじゃのと言っちゃ私に困らせる

色の欲ならこつちでも

常から主の仇な気を

知つていながら女房に

なつて見たいの欲が出て

神や仏を頼まずに

義理もへちまの皮羽織

親分さんのお世話にて

渡りもつけてこれからは

世間構わず人さんの前

はばかりず引き寄せて

楽しむ内にまたほかへ

それから闇と口癖に

森の小鳥我はまた

尾羽をからすの羽さえも

なぞとあいつが得手物の

ここが木遣りの家の株

ヤアやんれ引けよいい声かけて

エンヤラサ

やつと抱き締め

床の中から小夜着蒲団を

なぐりかけ

何でもこつちを向かしゃんせ

よういよんやな

良い仲同士の恋争いなら

痴話と口説は

何でもかんでも今夜もせ

才才東雲の明けの鐘

ゴンと鳴るので

仲直り済みました

よういよんやな

そよが締めかけ中網

えんやこれはあれはさのえ

才才 えんやりよう

げにも上なき獅子王の

万歳千秋限りなく

牡丹は家の物にして

お江戸の恵みぞ有り難き。